

資料紹介

経済学者の追悼文集拾遺

杉原四郎

はしがき

1988年、私は読売新聞記者の取材に対し、経済学者の追悼文集の蒐集について答えたが、その記事が1988年3月8日の同社夕刊の「ひと抄」の欄に「苦労いとわず追悼文集収集」という見出しで、つぎのように掲載された。

「わが国の経済学者の追悼文集を収集するのが長年の趣味兼仕事という元甲南大学長で同大学と関西大の名誉教授、杉原四郎さん（経済思想史—写真）。これまでに大河内一男元東京大学長ら約百人分を集めた¹⁾。ロンドンに留学していた31年前、研究対象だったステュアート・ミルの追悼文集単行本を古本屋でたまたま手に入れ²⁾、仕事に大変役立ってねえ。それがきっかけでわが国の偉い先生方について集め始めました。ほとんどが私家版や非賣品で出版されるため伝わりにくく、情報をキャッチするのに一苦労。労術誌の会員消息欄や特殊刊行物の出版に関する雑誌に欠かさず目を通したり、ふだんから友人たちに頼んだりしてアンテナを張りめぐらせている。大河内さんはカエルの声帯模写が大変うまくいったエピソードなど、論文には絶対載らない故人の人物や交友関係が紹介されていて楽しい。情報があればぜひ御連絡を」。

私は百人の追悼文集を『思想家の書誌——研究ノート』（日外アソシエーツ、1990年）にまとめて紹介し、その後本誌にその補遺を2回にわたって紹介したが³⁾、こうした新聞記事が出たこともあってか、最近では時々私の知らない人々から追悼文集についての情報

-
- 1) 『わが師大河内一男』編集・発行大河内演習同窓会、1986年6月発行、非売品。杉原『思想家の書誌』119-120ページ参照。
 - 2) *John Stuart Mill: Notices of his life and works, together with two papers written by him on the land question*, 1873. 本書については『思想家の書誌』3-4ページ参照。
 - 3) 杉原「経済学者の追悼文集補遺」, 本誌40巻3号, 1990年8月, 同「経済学者の追悼文集(終)」, 本誌40巻4号, 1990年10月。

が寄せられることがある。そこで本稿では、前稿発表後いろいろなルートであたに収集できた経済学者(広義)の追悼文集(単行本)13点を紹介する。

(1) 荒畑寒村(1887—1981)

『荒畑寒村 人と時代』, 発行寒村会(市川市市川3丁目19—14, 堀切方), 発行所マルジュ社, 1982年3月6日発行, 定価4,635円, A5版397ページ, 巻頭に写真遺影1葉。

寒村会代表の高橋正雄は「刊行にあたって」で、「この文を書こうとしていたら、五つの名前が思い浮かんできた。生年順にいうと、堺枯川, 幸徳秋水, 山川均, 大杉栄, そして荒畑寒村の五人の名前である。……この五人の生きざまと死にざまは, そのまま, 今日までの日本の百年……を象徴しているように私には思われる。そして荒畑はこの歳月の流れのなかで, この四人と解きはなし得ないほど深く強く結ばれて生きてきたのである」と、また「それにしても『運動』は荒畑という人間のすべてではなかった。荒畑はいい意味での文学者・作家でもあった。また花鳥風月という古い表現だが, 90歳で『名にし負うユングフラウの立ち姿わが初恋の人に似たりし』と詠う青年でもあった」とかいている(寒村のスイス紀行については堤明と堤為子の文章にくわしい)。高橋は寒村会の人々で編集委員会がつくれ、一周忌に間に合うように本書が刊行される次第をものべている。

I「論文と随想」には, 小山弘健(「寒村と日本の労働運動」), 宇井純(「公害の歴史と荒畑寒村」), 小田切秀雄(「文学者としての寒村」), 近藤真柄(「とりとめなき牛蒡式くりごと」)の四篇が, II「回想」には, 明治時代(信夫清三郎等8名), 大正時代(堺利彦ら20名), 昭和時代(戦前, 高橋正雄ら15名), 昭和時代(戦後1, 山花秀雄ら21名), 昭和時代(戦後2, 石山四郎ら20名)にわけて, 合計84名の文章がおさめられている。III「資料」には葬儀記録と追悼文目録と著書目録があり, 最後に編集後記(堀切利高)と「回想」執筆者一覧と再録文出典と人名索引がある。追悼文集に人名索引がついているのは珍しい。

『荒畑寒村著作集』全10巻が平凡社から1976—1977年に出た。その各巻について「月報」からつぎの4篇の文章が本書に再録されている。島田守三「谷中村と寒村氏」, 中野重治「『逃避者』の遠い記憶」, 添田知道「靴墨」, 鍋山貞親「解党と寒村」。

(2) 大杉栄(1876—1923), 伊藤野枝(1986—1923)

『労働運動——大杉栄・伊藤野枝追悼号』第4巻第2号, 1924年2月, 労働運動社, 発行編輯・印刷人近藤憲二, 1971年, ギロチン社・ネピース社, 黒色線社より共同で復刻版発行。A5版80ページ, 復刻版定価400円, 巻頭に2人の遺影など11葉。

巻末に「葬儀の記」, 「大杉・伊藤両君の略伝及び著作年表」とエスペラント語の大杉の略伝及び著作年表とを収める他, 以下の12の文章がなっている。

和田久太郎「大杉君の思想の一考察」, 岩佐作太郎「『正気の狂人』大杉の思想」, 延島英一「大杉君の非軍備主義論」, 水沢辰夫「大杉と日本の労働運動」, 加藤一夫「大杉栄君を憶ふ」, 支那の同志「同志大杉を弔ふ」, 富岡誠「杉よ! 眼の男よ! (詩)」, 山鹿泰治「追憶」, 和田榮太郎「大杉は大きかった」, 望月桂「頑張り屋だった大杉」, 村木源次郎「彼と彼女と俺」, 近藤憲二「大杉君と野枝さん」。

1923年11号の『改造』には山川均, 内田魯庵ら18名の追想文がのっている。なお, 大杉の三周忌にあたって出た『祖国と自由』第1巻第2号(1925年9月, 大杉栄追悼号)には, 和田久太郎, 加藤一夫, 山崎今朝彌らが執筆し, また平塚明が伊藤野枝について書いている。

(3) 奥村喜和男(1901—1969)

『追悼奥村喜和男』, 発行者奥村勝子(東京都渋谷区神宮前635の3の715), 発行年月日1969年8月19日, A5版283ページ, 非売品, 巻頭に遺影など11葉。

未亡人の奥村勝子さんは「あとがき」で, 百日祭の1969年11月23日に行われた追悼会の時の記録を中心として人々の追悼文をあつめ, それに故人の手紙や日記を加えて, 一周忌を機に本書を編集・公刊したと記している。

巻頭に佐藤栄作「奥村喜和男君を偲ぶ」をおき, 追悼文を, (1)各時代の足跡((イ)学生時代, (ロ)広島通信局時代, (ハ)通信省電務局時代, (ニ)内閣調査局時代, (ホ)企画院時代, (ヘ)電力国家管理, (ト)情報局時代), (2)故人の思い出, (3)面影を偲ぶ, (4)家族の回想に分け, 合計35人の文章をおさめる。大和田悌二のみ「電力国家管理」と「あゝ心友奥村喜和男君」の二篇を寄せている。(5)故人の書簡・日記・対談には, 手紙(高文受験後国元の福岡への手紙と, 1937年のベルリンからの手紙), 日記(1914—1916年), 対談「電力管理問題」(安藤良雄編『昭和経済史への証言』より)と, 略歴をおさめる。

1938年1月25日に衆議院に提出され, 3月26日に両院協議会で議決された電力国家管理関係法の成立に内閣調査局や企画院の同志達と協力して活躍した当時の故人に関する文章が多い(とくに鈴木貞一, 迫水久常, 荒木万寿夫, 有田喜一, 有竹修二, 大和田悌二の追悼文参照)。

わが国の官僚エコノストとして, これまで吉野信次や美濃部洋次の追悼文集をとりあげたが, 本稿で奥村と東畑四郎の二人を紹介するわけである。

(4) 河野五郎(1910—1978)

『河野五郎, その世界』, 編集河野五郎追悼集 編集委員会 (横須賀市桜ヶ丘 2-20-2043, 石崎方), 発行河野寿美子, 発行年月1979年7月, 非売品, A4版100ページ, 表紙及び巻頭に遺影など写真5葉(友人柳瀬正夢のスケッチもある)。

編集後記を本橋渥, 松村毅, 石崎悦史, 河野寿美子が書き, 最後に編集委員会の補遺があり, 1979年7月7日にあった「河野五郎先生一周忌の集い」のことが書かれている。この追悼文集は当日配布されたものであろう。

本書は, (1)葬儀当日の弔辞(横浜国立大学大崎平八郎, 日本商品学会中村巧), (2)横浜国立大学での30年(8名), (3)日本商品学会での活動(10名), (4)教育運動での活動(12名), (5)教え子たち(6名), (6)多彩な友人(13名), (7)親族の思い出(兄の河野与一他7名), (8)著作目録, (9)略年譜, (10)編集後記より成る。

越村信三郎は, 河野が横浜国大の前身横浜工業語学専門学校に着任した1944年以来, 「30年以上同じ学園で苦楽を共にした」こと, 河野は「学生を愛し, かつ酒を愛した。…日頃の組合活動でも, メーデーの行進でも, 大衆の歩むところに, つねに河野さんの姿があった」こと, 河野が『資本論』の立場から商品进行研究し, 商品学の分野に新風を吹きこんだことなどをのべている。また関東学院大学の清水嘉治は, 河野が長洲一二的紹介で神奈川教組元書記長と一緒に彼の下宿をたずねてきて, 「教育を守る会」で小・中学校の先生方の教育を手伝ってほしいと口説かれたこと, 夜中の二時頃になって大部酔った河野が「大学の先生はみんな研究で忙しい。君も忙しい。だが月に一度でいい, いまの教育を守っていかないかぎり, 日本の子どもの幸せはない」といったことなどを書いている。そして俳人の古沢太穂は, 河野の告別日の日の句, 焼香まで空保たせよ白木槨, 汝が魂の白日白雨告別混む, の二句をたむけている。

(5) 北野熊喜男(1907—1989)

『緑樹——北野熊喜男先生追悼号——』, 発行緑樹会, 制作三和書房, 1990年6月3日発行。A5版274ページ, 非売品, 巻頭に遺影など写真37葉。

門下生代表の百々和が「ご挨拶」の中で, 故人の一周忌(1990年6月3日)にこの追悼文集を出すこと, 恩師高田保馬を補佐して「戦前からマルクス主義と鎧かぶとに身を固めて論争」した故人が「昨今の東欧, ソ連そして日本社会党の状況をご覧になられたら, 『俺の主張が正しかった』と快哉を叫んだであろう」と書いている。また編集世話人福田亘, 夏目隆, 新庄浩二, 岸本哲也, 足立正樹(以上神戸大学)の連名の「あとがき」で, 夫美子未亡人と故人の著書を多く出した三和書房の田中稔とへの謝意をのべている。

最初に1989年6月5日の葬儀の時の弔辞・挨拶4篇がおかれ, つぎに未亡人はじめ御遺

族、旧友、同僚などの文章15篇、門下生で学界に在る者26名の文章、ゼミ出身者で社会に出ている者39名の文章、合計80篇をおさめる。

『緑樹』は北野ゼミの会の名であり、会誌の題名でもある。井上年弘の「緑の樹」によると、これは故人が愛していた『ファウスト』の「すべての理論は灰色で、緑なすは生命の黄金樹のみ」の一句に由来する。このゲーテの言葉は本書の裏ページに原語で印刷されている。

置塩信雄は「北野先生のこと」の中で、置塩が次第にマルクス経済学にひかれていった頃よく故人は討論の相手になってくれたが、その頃の故人のつぎの言葉が印象に残ったと書いている。「置塩君、君は数理経済学ばかりやっているから、マルクスに惹かれるのだろう。マルクスの経済学が社会的なものを含んでいるのが魅力なのだろう。すこし社会学を勉強してみたら、マルクスへの評価が変わってくるのじゃないか」。

故人は恩師高田保馬の経済学者の面のみならず社会学者の面をも継承した。故人の学位論文は『経済社会学の基本問題』であり、経済社会学会の二代目の会長でもあった。

(6) 鈴木眞洲雄（1896—1964）

『意識をもった生命の思想、鈴木眞洲雄・遺稿と追憶』、発行所、鈴木眞洲雄・遺稿と追憶編集委員社（東京都渋谷区神山町18の3、渡辺達也気付）、発行年月、1976年11月、非売品、頒価800円）、A5版82ページ。巻頭に遺影など写真6葉。

編集委員（8名）の一人渋谷定輔が「鈴木眞洲雄と三たびの出会い——あとがきにかえて」を巻末に書いてるが、渋谷はその中で、鈴木に初めて遇ったのは1982年暮に鈴木の仕事していた秋田消費組合に於いてであり、2回目は敗戦直後の東京において日本協同組合同盟創立準備中の鈴木（彼は1945年1月に興農合作社中央会東京事務所長になり「満洲」から5年ぶりに帰国していた）であり、23回目が鈴木追悼会（1964年11月18日）であったという。鈴木が1945年11月に創立し、中央委員長となった日本協同組合の創立時の役員名簿が巻末にある（会長賀川豊彦、顧問有馬頼寧、千石興太郎、志立鉄次郎）。

第1部遺稿に意識を持った生命、日本協同組合創立宣言、秋田医療利用組合の誕生など8篇を収録、第2部追憶に山本秋「木人鈴木眞洲雄先生を偲ぶ」、鈴木眞洲雄追悼会の記録（渋谷定輔はじめ、山本秋、黒川泰一、中林貞男、関誠一、渡辺達也、宮原良市、田中俊介ら15名の発言がある）と前掲の渋谷の文章、および最後に年譜をおさめる。

(7) 関一（1873—1935）

『故関市長を偲ぶ』、大阪市教育会（大阪市北区西扇町2、代表者大浦倉之助）編、1935年5月5日発行。非売品、A5版134ページ、巻頭に遺影、市葬風景など写真10葉。

序にいう。故人が理事長であった大阪市教育会は、近く故人の百日祭を迎えるにあたり、「故人の徳を讃へ功を頌せんものと、この小篇を編むことを企てた」と。巻末に「市葬概況」と「編集後記」にある。

大阪市長加々美武夫「追慕之辞」から大阪市助役瀧山良一「思い出ゝ」までの13篇は、大阪市長としての故人の思い出を(数篇はげん子夫人の追憶を語る)、つづく武田五一「故関博士」は故人の縁者として私人としての故人の側面を語る。最後の4篇、すなわち大阪商大教授田崎仁義(「学校教育者としての故市長」)、元神戸商大教授津村秀松(「友人としての故関市長」)、大阪市立市岡商業学校長堀口米太郎(「関市長を偲ぶ」)、大阪市立育英商工学校長村田次郎(「故関市長と野中兼山」)は、研究者、教育者としての故人についてのべる。田崎は門下生の一人として、関一の略歴、その学問的業績(鉄道学からはじまって商業・工業政策から工場法や都市計画に及ぶ)、大阪商大の学風の育成などを書き、津村は助役就任当時の事情を説く中で、関を大阪につれてくるには京大教授戸田海市が大きな役割をはたしていたことを強調している。

なお関一が生前たびたび寄稿した『大大阪』は1935年追悼号を出し、諸家の文章をのせているが、未見である。

(8) 副島種典(1912—1989)

『和して同ぜず——遺稿・追悼集、副島種典先生を偲んで、一人の社会主義経済学者の人と人生——』、副島種典追悼集刊行委員会編(東京都千代田区西神田2-4-1、東方学会ビル4階、日中友好協会内)、発行光陽出版社、定価2,500円、B 6 429ページ、1991年5月20日発行、巻頭に遺影など写真18葉、その中に「和而不同 副島種典」と書かれた色紙がある。

刊行委員会の「刊行にあたって」によれば、故人の歿後一年に当たる1990年7月22日の「偲ぶ会」で「追悼集」の出版が約束され、10カ月かけて出版された。この追悼集刊行の呼びかけ人(26名)の氏名および刊行委員(伊藤敬一〔日本中国友好協会理事長〕他10名)の氏名は巻末にある。

本書は次の三部より成る。I 遺稿集、(イ)私の研究歴、(ロ)私の社会主義論、(ハ)私の生いたちと歩んだ道、(ニ)随筆・随想。II 先生を偲ぶ、(1)追悼文、秋山峰生から和田重司まで50音順で80名、(2)「偲ぶ会への言葉より」、芥川集一より渡辺啓子まで50音順で118名。(1)から服部文男、(2)から丸山真男の文章を抄録しよう。「先生が東北帝国大学法文学部経済学科に在学しておられた1930年代中葉には私の父〔英太郎〕が同科の教授として在職していたのでそのお名前は小学生の頃からしばしば耳にしていた。……先生もまた、明治政府の外

務卿、のちに内務大臣となった種臣伯の令孫であるというので、子供心にも強く印象づけられた……先生の尽力で東北大学附属図書館に入ることとなったのは、マルクスがルーゲと共同で編集した『独仏年誌』創刊号……と、マルクスの……『フォークト君』……のエンゲルスあて献呈本との二人である」（略記）、「種典さんとはお父様の世代からの御縁でした。種典さん御兄弟の御父上、道正伯が戦前に京城日報社長をなさっていたころ、私の父は同社主筆として色々お世話になり、私共兄弟も父につれられて……。また種典さんと私は兵隊のとき広島宇品の船舶司令部でまったく偶然に隣りの班に属し、時折顔を合わせるごとに戦争の終末などについてひそかに語り合った……」（丸山）。Ⅲ年譜と著作目録。なお巻末に、副島台子（夫人）「お世話になった皆様へ——御礼にかえて——」と編集後記がある。

(9) 玉野井芳郎（1918—1985）

『玉野井芳郎氏を悼む』、編者藤原良雄、新評論、1985年12月。『新評論』第31号の1—18ページを小冊子にしたもの。遺影など12葉の写真を挿入。非売品。

増田四郎からイバン・イリイチまで25名（到着順）の追悼文をあつめている。増田と樺山紘一は地域主義集談会での交友を、宇沢弘文は中国旅行を共にした事を、宇井純と川満信一と金城朝夫と安里英子と金城睦と支那覇健二とは沖縄時代（故人は東大を定年退官後1978—1985年まで沖縄国際大学教授であった）の思い出を語り、小出昭一郎と室田武とはエントロピー学会創立にまつわることをのべ、福田歡一と西川潤とは故人が最後の職場となるはずの明治学院大学国際学部に託した夢を語る。

こうした諸家の文章から、故人の多彩で変化にとんだ研究経過がうかがえるが、大内力は「かれはよくいえば知的好奇心がすこぶる旺盛で、学問的にも進取の気象に富んでいた。ということは、少し意地悪くいえば、新しいもの好きで、じっくりと理論の展開を図る根気に欠けていたということである」とのべている。小林昇は「玉野井さんの学問は二転し三転した。……わたしはこういう玉野井さんを変節者と見なかった、少数者のうちの一人である。ただわたくしは、かつてのマルクシスト玉野井がエコロジスト玉野井としては社会変革の主体と変革への具体的プランとへの関心を忘れて見える点が不満であった。また、彼の後半生に至ってはじめて開かれたように見える、異次元的諸社会への興味が素朴に過ぎると感じることもあった」と書いている。

イリイチの文章は、1985年10月21日の密葬で読まれた弔辞である。巻末に略年譜と主要著作目録があるが、故人は晩年にイリイチの二著を邦訳している（『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う——』岩波書店、『ジェンダー——女と男の世界——』、同、1984年）。

(10) 東畑四郎(1908—1980)

『東畑四郎・人と業績』、編集東畑四郎記念事業追悼録編集委員会、発行同記念事業実行委員会(農政調査委員会内)、1981年10月5日発行。A5版589ページ、非売品、巻頭に遺影など写真9葉。

東畑四郎記念事業実行委員会委員長の川野重任は、「まえがき」の中で、故人が農林省事務次官を辞してから20余年がたつてからもなお第一線の仕事についていたが、入院後3カ月して他界という慌しさで、期せずして記念事業企画の議がもち上がり、この追悼録の編集・刊行と研究奨励金制度の創立という二つの事業が計画されたことについてのべている。記念事業実行委員会の顔ぶれは435ページにのっている。

本書は第一部「農政のこと」(最初の一篇をのぞき全部戦後のもの)、第二部「想うこと」に故人の文章をあつめ、第三部「四郎さんを偲ぶ」に荒木清ら旧友・知人をはじめ最後の長兄東畑精一にいたるまで57人の追悼文、および座談会をおさめている。巻末に東畑志づの「おれの言葉」、「年譜」および「あとがき」(編集委員山路健)がある。第2部に収録されている故人の講演「戦前・戦後の農林官僚を解剖する」(『日本農業の動き』第11号、1968年1月)は多年農林行政にたずさわってきた見識で率直な「解剖」がなされていて興味ぶかい。

東畑四郎は1931年東大卒業と同時に農林省に入り、戦時中中国に在勤したり、企画院に移ったり、戦後は経済安定本部に出向したりしたが、1954年12月に退官するまで、終始農林行政の道を歩み、退官後死去するまでの26年間も、側面から終始農政にタッチした一生であった。その中で戦後の第一次農地改革の立案に中心的役割りをはたしたが、それに関しては1981年7月の座談会(とくに斉藤誠や大和田啓気の発言)にくわしい。

第二部に収録されている故人の講演「戦前・戦後の農林官僚を解剖する」は、一貫して農政にたずさわって来た故人の体験と見識にもとづいて率直に農林官僚氣質を「解剖」したもので大へん興味深い。松浦龍雄が書いている「最初で最後の著書『昭和農政談』」は、未見だが、戦後の農政、とくに、吉田首相と同行して日米余剰農産物交渉で渡米した——当時東畑は農林次官で、政府代表の愛知撥一通産相とは大学の同期生で北京時代の仲間であった——ことなどがでてきて、故人は松浦を聞き役に思存分語ったようである(本書の第一部に、この問題についての手記や講演が三篇おさめられている)。

(11) 能地清(1946—1984)

『日本帝国主義と対外財政——能地清遺稿・追悼集』、能地清遺稿・追悼集編集委員会(委員長大石嘉一郎、東大社研大石研究室気付)。1985年9月23日発行、非売品、B6版、

202ページ、巻頭に遺影など写真9葉。

「刊行にあたって」で故人の東大大学院での指導教授だった大石嘉一郎は1984年7月に会津の飯豊山で遭難し、38歳で早世した故人の遺志をくみとり、捜索活動から葬儀までの諸費用をひいた募金の残りの資金で本書を刊行した所以をのべる。

本書は、第一部「日本帝国主義と財政」と題する遺稿、第二部追悼文集、第三部搜索報告より成り、巻末に歴略及び業績、宮本健太郎の「後記」がある。第一部は、「日清・日露戦後経営と対外財政1896—1913——在外政府資金を中心に——」（東大『経済学研究』23号、1980年10月）と「日清・日露『戦後経営』と財政問題（1896—1913）——その対外的関連を中心として——」（『土地制度史学』第92号、1981年7月）を中心に、報告要旨、遺稿など6篇と書評5篇、および石井寛治の解説と武田晴人の研究経過をおさめる。第二部は、(1)横浜市立大学時代（指導教授田中正司はじめ13名）、(2)東京大学大学院時代（阿部武司、有江大介、石井寛治、大石嘉一郎、加藤幸三郎、橋川武郎、尊原るみ、佐藤進、武田晴人、中村政則、新村聡、深見保則、宮島英昭、柳沢遊、山本義彦、米田康彦ら51名）、(3)会津短期大学時代（上野喬、内海健寿ら21名）、(4)遺族（兄末広、兄秀樹、須本サヨコ、須本浩枝）の四部より成る。

略歴によると、故人は広島の廿日市高校から横浜市商学部に進み、1976年東大大学院に進学、1983年に経済学研究科博士課程を学位取得退学、同年4月に福島県立短期大学講師になる。そして1984年7月10日、飯豊連峰に単独登山、悪天候下で消息を絶った。

石井寛治は第一部の解説で、能地の問題意識についてつぎのようにのべている。故人が帝国主義財政の対外的関連に注目したのは、1970年代の日本近代経済史研究が1960年代に始まった産業革命研究を批判的に継承しつつ政治的契機と対外的契機を大胆にとり込む方向に進んだ（中村政則や山崎隆三のような）という事実であった。故人は本書に収録された（生前発表された）「二論文を通じて、日本帝国主義の特徴とされてきた『侵略』と『従属』の二面性が、国家財政の対外的側面にいかに現れているかを究明するとともに、当時の国家財政のあり方が、逆にそれら両側面を同時にいっそう強めていったというメカニズムを實に見事に解き明かした」。

(12) 平生鈞三郎（1866—1945）

『平生鈞三郎追憶記』、編者 津島純平、発行所拾芳会（東京都千代田区丸の内3丁目6）、1950年7月20日発行。A5版213ページ。非売品、巻頭に遺影など8葉。

編者の「まえがき」によれば、平生が歿して満三年の1948年11月27日に開かれた追憶会に300名が集まったが、その後この追憶談を基にして「追憶記を編し上梓せよとの要望し

きり」で、1949年秋か計画を立て、手紙で寄稿をお願いしたが、「大長老氏お三人を除いて他の25氏が進んで玉稿を給わ」った。「先生遠逝5年の今日、東京海上、日本製鉄両社の多大の援助によって、本追憶記を上梓し以て『平生伝』の前駆となしたい」。

本文には、三鬼隆から一門下生まで29名の追憶文をおさめ、巻末に太田成和「平生鈞三郎小伝」と年譜を附す。小伝と年譜は1944年9月平生の郷里岐阜県加納町の太田成和が書き、平生の校閲をえたものである。

1948年11月の追憶会の時の三鬼日鉄社長の挨拶、星野行則のカナモジで書いた「平生鈞三郎君ヲ憶ウ」につづいて、下村海南、小林一三、村田省三、伊藤忠兵衛ら、さらに湯沢三千男、天野貞佑、永野重雄、小畑忠良、竹中藤右エ門、藤井丙午と、ほぼ年齢順に追憶記が並べられ、水沢謙三(近親者)、沢正治、津島純平、中川路貞治(以上三名は門下生、拾芳会会員)の文章が最後に位置する。追憶記(談)の中には平生の各方面における活動の具体的な事実がのべられたものが多く、「はしがき」にあるように本書は書かれるべき平生伝に対し、有益な資料を提供している。娘婿の水沢にあたえた平生の手紙——平生のイギリス(イギリス人)覬や近衛内閣には入らず広田内閣に入った事情などをのべた——は貴重な資料であろう。平生は長年日記を続けたのみならず多くの人々に手紙を書いたが、とくに門下生に対して、毎年2、30人に「それぞれに向かってその者に話をするように」、諄々とした手紙を書いていたことを津島純平は書いている。また平生の晩年の秘書藤井丙午は平生の経済思想について「先生が資本家であり、資本主義を信奉して居られたことは当然のことであるが、しかし先生の思想の底流には社会主義に通ずる或るもの——少なくともそれを理解するだけのものが潜んでいたことはたしかである。今日謂うところの社会化された資本主義というのが当てはまるかも知れない」とのべている。

(13) 守本順一郎(1922—1977)

『守本順一郎——思想史への道なかばに——』、編集・発行者安藤良雄、発行『守本順一郎——思想史への道なかばに——』刊行会(名古屋大学法学部山田公平研究室内)、製作未来社、発行年月日1979年10月、非売品、B 6 323ページ、巻頭に遺影一葉。

安藤良雄は編集委員会を代表して書いた序の中で、「雄大な学問的プランの業なかばにして」故人が病にたおれて2年近く立った今日、門下生を中心に追悼録の編さんが進められ」たが、とくに「宇佐美博、岩間一雄、山田公平、雀部幸隆の諸氏……の献身的な尽力のあったことを記して」いる。

I 弔電・弔辞・追悼の中では今堀誠二、水田洋、佐々威二郎の名大法学部葬での追悼のことば、追悼会での丸山真男、田口庸一、木村博晃、逆井孝仁の追悼のことば、それと

岩間一雄の「その生涯の問いかけるもの」が注目される。岩間の文章は、故人が東京高師時代に諸橋轍次と能勢乾次の薫陶をうけ、日中の古典に親しむとともに哲学や宗教の探究をしたが、戦後東大経済学部で経済学の研究に没頭、安藤良雄の演習で『資本論』や「日本資本主義論争」を研究する中で日本の近世思想史に興味をもち、丸山真男の門をたたくことになり、やがて名古屋大学法学部の東洋政治思想史の担当教官になる、研究者としての歩みと、教官としていかに学生を指導したかという点を中心に人間守本順一郎のプロフィールを描いている。Ⅱの回想は高師時代、海兵時代、東大時代、名大時代、門下生、遺族の6項目にわけて60名の文章が収められている。Ⅲに故人が司会したNHK市民大学講座『国学の思想』が収録されている。巻末に年譜（岩間一雄編）とあとがきがある。

丸山真男「御遺影を前にして」、安藤良雄「思い出すまに」、鈴木正「大事な人——短かかった出会と別れ——」、西谷能雄「出版人の目に映じた守本順一郎さん」などの文章が故人をしのぼせる。なお本書を制作した未来社から、故人の著作『東洋政治思想史研究』、『アジア宗教の序章』、『徳川政治思想史研究』、『徳川時代の遊民論』、『日本経済史』が出ている。最後のものは、もと1958年学燈社から刊行されたものである。本書の「あとがき」で岩間一雄は、「本書をもって守本順一郎遺稿集の刊行は一応完結する」とのべている。

む す び

以上に紹介した追悼文集は、原則として単行本のかたちで出版され、複数の寄稿者の文章をあつめたものである。本稿に収録したものの中には、(2)や(9)のように、元来は雑誌にのせられたものであったが、後にその号だけ独立して複製されたものがある。だがそのような複製はなく、雑誌にのせられたままである追悼特輯号にも、貴重な文献がいくつかある。それらを完全にリスト・アップすることは私の手にあまるが、手もとにある二冊の雑誌を紹介しておく。

矢口孝次郎（1903—1978）

『経済学会報』創刊号、関西大学経済学会発行、1980年12月。「故矢口孝次郎名誉教授追悼文集」同誌113—168ページ。略歴及び著作目録の他30人の追悼文が収録されている¹⁾。

久留間鮫造（1893—1982）

1) 私も「J. S. ミルと矢口先生」を寄せている。杉原『読書燈籠』（未来社、1982年）所収。

『マルクス経済学レキシコンの栞』第14号、大月書店、1985年9月。特集久留間鮫造先生を偲ぶ」同誌1—16ページ。最初に『レキシコン』編集委員会の写真、宇佐美誠次郎ら11名の追悼文を収録。大島清「人間・久留間鮫造」は『法政』1983年1月号からの転載²⁾。

なお経済学者にかぎらず、故人の追悼号を出している雑誌の目録としてはつぎのものがある。

『追悼号書目』、編者及発行者伊藤一男、発行所、カズオ書店(大阪市北区桜橋交差点)、1929年4月発行、非売品(300部)。

『愛書趣味』臨時号、追悼誌文献篇、発行人青山容三(大阪市南区長堀橋筋1丁目)、編集人齊藤昌三、1932年8月発行。

前者は『福沢先生哀悼録』(明治34年、『慶応義塾学報』)から『五空先生追悼号』(昭和4年2月、『俳星』)まで合計149点を収録している。後者は明治・大正・昭和にわけ、各年毎に追悼誌をならべており、前者より豊富(明治期について見ると、前者が19、後者は23だが、大正期は前者が70、後者が187とその差が開き、昭和になるともっと開く)になる³⁾。文学者、政治家、宗教家が多く、学者とくに経済学者はつぎのように比較的すくない。

田尻稻次郎、『向上』大正12年9月。

大西猪之助、『北方日本』、(VI—3)、大正14年3月⁴⁾。

中村茂男、『明大商学論叢』、II、昭和2年9月。

左右田喜一郎、『思想』、72、昭和2年10月。

横井時敬、『耕地』、昭和2年、I—3、12月。

小林丑三郎、『政経論叢』、V—1・2、昭和5年4月。

福田徳三、『如水会会報』、79、昭和5年6月。

高島素之、『急進』、II—11、昭和5年12月。

-
- 2) 大原社会問題研究所『研究資料月報』第294号(1983年3月)も「特集久留間鮫造先生追悼号」である。
 - 3) 前者はホイットマン、ダンテ、レーニン、カントなど外国人の記念号を採録しており、後者には皇室に関するものも収録されている、という収録雑誌の範囲にちがいはある。
 - 4) これは『経済学者の追悼文集補遺』(本誌40—3、1990年9月)でとりあげた。実質的には単行本の形式に近いかたちで刊行されたからである。

井関十二郎、『実業界』44—7，昭和7年8月。

経済学者の追悼号は，1932年以後，とくに戦後急増する。その例はかつて「雑誌特輯号に見る経済学者の追悼文集」⁵⁾で大内兵衛・中山伊知郎・高橋誠一郎の三人についていくつかの追悼号を紹介し，また本稿の(2)や(7)で雑誌の追悼号のことを紹介するのみならず，矢口と久留間の追悼号をとりあげた。これらを含め，特輯雑誌をも視野に入れた経済学者の追悼文集の全体的な整理は，今後の課題であろう。

5) 『甲南経済学論集』第23巻第2号，1982年10月，杉原『日本の経済雑誌』（日本経済評論社，1987年）所収。